

## 『移民のヨーロッパ史 ドイツ・オーストリア・スイス』 書評会

### 開会挨拶

今日は、『移民のヨーロッパ史』というタイトルで2021年に翻訳出版された書籍の書評会を企画いたしました。この本が対象とする「人の移動」というテーマは、以前から、研究上の、そして一般の関心を引いてきたテーマですが、近年、「人の移動」ということをことさらに意識せざるをえない出来事が続いたように思われます。

たとえば、2015年以降のヨーロッパのいわゆる「難民危機」を受けて、難民の受入れが世界的な喫緊の課題として存在すること、その対応という面で日本が大きく立ち遅れていることが強く意識されるようになりました。移民・難民の受入れという課題が全体として意識されるなかで、国内における外国人の扱いが、技能実習生の問題や、入管における人権侵害などを焦点として批判的に顧みられるようにもなってきております。

新型コロナウイルス感染症の影響もまた、「人の移動」に対する関心を高めました。それまで当然であった国際的な移動が——それどころか国内の移動でさえ——大きな制約を受けるという状況が全世界的に生まれたことが、歴史的に連続と続いてきた「人の移動」という現象を改めて考えようとする動きを呼び起こしましたし、入国制限をめぐる議論は、国家による出入国管理、そしてその根幹にある近代国家における国籍者と非国籍者のあいだの線引き、その正当性と不当性という問題を、われわれに否が応でも意識させずにはおかないものでした。

さらに、今年2月のロシアによるウクライナ侵攻、それによって生み出される大量のウクライナ難民と、彼らの受入れをめぐる全世界的な議論は、難民受入れの実績において大きく立ち遅れる日本にあってすら、これまでにない規模で受入れの体制を整えようとする動きにつながりました。もっとも、それが国境を超えた「人の移動」をめぐる体制をどこまで恒久的に変えるものになるかについては、見えてこないという状況でもあります。

今日は、こうした近年の動きを念頭に、『移民のヨーロッパ史』という本を中心に置きながら、「人の移動」という問題について、歴史と現在を接続させながら考えていこうという企画です。本書評会を主催する東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターは、ドイツ学術交流会（DAAD）

の支援を受けて運営されているドイツ研究センターです。『移民のヨーロッパ史』は、副題に「ドイツ・オーストリア・スイス」とあるように、ヨーロッパのなかでもとくにドイツ語圏の「人の移動」に焦点を合わせており、それが、本センターでぜひこの本を取り上げて議論してみたいと考えた理由です。

さらに申し上げるならば、『移民のヨーロッパ史』は増谷英樹先生が中心になって翻訳・編集を進められた書籍ですが、駒場のとくにドイツ現代史の人脈は「オルタナティブ研究会」という研究会を通して増谷先生とご一緒に議論する機会を何年も前から継続的にもってまいりました。『移民のヨーロッパ史』の翻訳・出版には、増谷先生のほかにも、東京大学駒場キャンパス、とくに本センターと関わりの深い方が何人か関わられたことも、この書籍を書評会の対象に選んだ理由のひとつです。

今日の書評会の評者としては、ドイツ・ポーランド史から衣笠太郎さん、ドイツの演劇学がご専門でとくに難民の表象を研究されている北岡志織さん、スウェーデン政治外交史がご専門で移民の問題にも詳しい清水謙さんのお三方をお呼びしました。このお三方はいずれも、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターが運営する教育プログラム——修士課程「欧州研究プログラム」と博士課程「日独共同大学院プログラム」——を履修された方々です。今日は、若手の研究者からの鋭い問題提起を聞くことができるものと期待し、皆さまとともに、しばし楽しい思考と議論の時間をもつことができればと願っております。

\* \* \* \* \*

### 中東欧の境界地域の視点から

衣笠太郎

(神戸大学大学院国際文化学研究所)

ここでは『移民のヨーロッパ史』について、中東欧史を専門とする筆者の視点と関心からコメントをしたい。最初に本書の全体像から述べると、これはもともと事典であり、その意味で事実説明的な記述が基本となっている。「移民」という現象に広く光を当て、それを全ヨーロッパ規模で簡潔・概略的に記述しようとする試みである。その

中で主に中欧＝ドイツ語圏に絞った訳出がなされ、問題とする領域を明確化させている。また各章の末尾に配置された「訳者解説」とコラムが事典的・説明的な叙述から外れた面白さを提供してくれている（これを順に並べると以下のようになる：東風谷太一「用語解説」、東風谷太一「ドイツ語圏における移民史研究の歴史」、前田直子「ドイツはなぜ難民を受け入れたのか」、増谷英樹「現代オーストリアの移民・難民問題と国民意識」、穠山洋子「外国人受け入れに揺らぐ永世中立国」、増谷英樹「南ティロール旅行記」）。こうした翻訳版作成にあたってのローカライズと訳者諸氏の多大なる努力に敬意を払いたい。

本書を開いてまず驚かされるのが、「移動する人々」の多様性についての明快な整理である。近世から現代までの移民は多様であるが、動機付け、距離、方向性、滞在期間、社会経済的空間、経済セクターで分類・整理されている。特に50頁の表序1「移民の類型」は今後の移民研究において重宝するものとなるであろう。序章では移民研究の伝統的方法論への疑義についても言及されており、旧来型の手法だけでは不十分なことが示される。「(一般的な概念としての移民は) 移民という行為を、一度きりの、単一の目的地へと向かう移動として単純に捉え、送り出し国においては不十分と感ぜられた生活条件(「押し出し要因」)が、受け入れ国への到着によって改善される(「引き付け要因」とみなす思考モデルである」(31頁)。こうした単純な図式に対して、本書では「行為理論的もしくはプロセス重視的な方法」(32頁)が基礎に据えられているのだという。こうした方法論的な基盤のうえに本書は執筆されていると言えるが、以下では第1章以降の内容を章区分にこだわらず横断的に紹介しながら、筆者が興味を抱いた論点に絞ってコメントをしていきたい。

ドイツとオーストリアに関して興味深いのは、近世・近代における移民(特に海外移民)の送出国から、第二次世界大戦後の受入国へと変貌したことが叙述されている点だろう。例えばドイツにおいては1960年代以降の西ドイツでの労働移民(ガストアルバイター)の大量移住があり、オーストリアでも1960年代以降、東側からの政治難民や労働移民が到来したのである。こうした人々の到来と定住は、彼らの社会統合の複雑さや困難さと表裏一体の出来事だ。特にオーストリアでは、コネのある「身内」が就職や出世で有利になる仕組みがあったために、移民は社会経済的に疎外されがちという問題もあった。

移民という事象を理解するためには、移民自身の希望と現実および受入側の対応を考慮に入れる必要がある。移民たちは、新しい生活と仕事、社会的・経済的上昇の夢という新天地への希望を抱いて居住地から出発したことだろう。基本的に、第二次世界大戦後の中欧では労働移民として一時的な受入のみが容認されてきた。彼らは非熟練/低

熟練で低賃金の労働への従事を余儀なくされ、「景気の調整弁」として景気が下向いて労働需要が低下すると容易に解雇された。こうした受け入れ国側の社会的・経済的な事情もあり、外国人労働者は社会的・職業的に下層に置かれることとなった。

他方でこうした外国人移民に対しては、受け入れ国内で拒否感が広まることも少なくない。具体的な事例としてスイスでの反イタリア系・バルカン系移民への様々な反応、オーストリアでの反移民＝難民の動きが挙げられている。こうした移民排斥やゼノフォビアの動きに関連して、近年の中東欧では「民族自然権」という概念が注目を集めていると中澤達哉は指摘する。民族自然権とは元来はハプスブルク帝国の知識人L・シトゥールが1845年頃に提唱したものであり、彼によれば諸「民族」はそれぞれ人格権、生存権、言語権、教育・文化権、居住権の擁護などの基本的な権利を集団として保持すると主張された。重要なことは、2015年の欧州難民危機に際して再発動されたという事実である。スロヴァキアでは、政治家から以下のような発言が発せられたことはそれを象徴している。「もし独立国に自然権というものが存在するのなら、それは、誰がその国にきて生活できるのか、それを決定する権利のことである」(R・スリーク)。「いかなる人も、客を家にいれるかどうかを決定する自由権をもつ。スロヴァキア民族もまた、ムスリムの移民たちをわれらの領土に入れたくないと主張する自然権を有するのだ」(R・シヴェツ)。受け入れ国では、「民族」をひとつの単位としてその権利を要求し、それによって移民・難民を排除しようという動きがみられるのである。

関連して、19世紀末頃から、移民にとってもナショナル・アイデンティティが重要となってくるという点は本書における重要な指摘だろう。この時期からすでに、受け入れ国の社会において民族文化的、「人種的」、「国民的」な区分が様々な場面で採用されるようになり、移民に対しても排除と包摂の機能を果たすようになる。「ナショナルな成員」であるかどうかということは国民国家における平等性を担保する主要な要素となるのである。とはいえ、こうしたナショナル・アイデンティティやエスニシティに関しては、それを無批判に受け止めてしまうことは避けるべきであろう。本書にも、そうした集団概念の導入により「当該の集団が硬直的に映り、偏見が固定化されてしまう一方で…同化のプロセスが視野の外にこぼれ落ちてしまう」(74頁)という批判があり、「〇〇系」のように一括りにされがちな集団が同質性を持っているように考えるのは人文社会科学においては典型的な誤謬であるとみなされる。主観的な集団的アイデンティティは出生地や出自にかかわらず個人それぞれで異なっていると言え、それを単一の集団の思考や感情としてしまうのは安易である。

さらなる論点としては移動する人々と境界領域との関連がある。ここではそれに関して井上暁子の議論を援用するが、ポーランドの文学研究者チャプリンスキは現代世界の移動のタイプには①間借り人 *lokakizator* ②特定の場所のみに居住を許された人 *zlokalizowani* (=移住を強制された空間の囚人) の二種類がいるとしている。両者の最大の差異は、原住地から移住先への移動に際して①は安全で快適な旅を享受するのに対して、②は非常に危険で複雑で金のかかる旅を冒す必要があるという点である。移住という事象には、移動の時点からすでに国外の空間へのアクセスや情報の面での大きな不平等が横たわっているということである。ここでの井上による議論の主眼は「ドイツ＝ポーランド国境地帯の文学」という移動文学である。その文学的実践を行う作家たちは自らを「移民」「難民」「亡命者」ではなく、世界を舞台に空間を自由に移動する(文化や言語の入り混じる)「雑種性」を有する主体として理解し、移動や境界変動の中でのアイデンティティと記憶の変容と向き合い続けている。こうした取り組みは移民を新しい枠組みへと誘う一つの手がかりとなるかもしれない。

最後にもう一つ指摘しておきたいのは国境変動地域という観点である。「境界変動地域」というのは山口博史の提唱する概念であるが、これには移動を伴わずとも境界(国境、行政的境界)の変動によって特定の地域や住民の立場からはアイデンティティや地域生活に影響が及ぼされるような事象が念頭に置かれている。境界変動は何も稀で特殊な出来事ではなく、国際機構の変容、国家の解体、地方分権の再編など歴史的にも現代でもありふれた出来事である。山口は、域内定住者であっても、「境界変動がもたらす越境」も人の移動に関する研究の範疇に含めるべきではないかと提唱している。

全体を踏まえて、討論に向けて意見と質問をいくつか投げかけたい。第一に、前近代の移民と近代の移民の差異である。とりわけ19世紀後半以降にナショナリズムが台頭していく過程で移民・難民に対しては異質な他者というカテゴリーがなされるようになった。現代の民主主義を基調とした社会においては、こうした立場を乗り越えてゼノフォビアとポピュリズムの台頭を防ぎつつ、彼らもまた包摂する手段を考える必要があるのではないだろうか。

第二に、「移民という行為を、一度きりの、単一の目的地へと向かう移動として単純に捉え」られないという本書の前提に関するものである。個別具体的な事象や人間を分析対象とすることの多い歴史研究者として気になるのは、移住や移動が生活の一部をなしている人々をどのように記述するのか、また国内外の非常に多様・大量の「移民」をどのように選別し記述するのかという問題が浮上するだろう。

第三に、移動しなくても居住地の変容を経験する人々の

存在があるだろう。山口の提唱する国境変動地域も「移民」研究の枠組みに入れても良いのではと考えるが、それは本書ではどのように活かされているのだろうか。以上のコメントおよび質問により、本書の打ち出す移民研究をめぐる議論がより一層活発化することを期待する。

#### 参考文献

- 井上暁子 2022.『語りの断層——ドイツ＝ポーランド国境地帯の文学』九州大学出版会  
 中澤達哉 2021.「寛容か排除か?——スロヴァキアのシリア難民問題と民族自然権」羽場久美子編『移民・難民・マイノリティ——欧州ポピュリズムの根源』彩流社、255-268  
 山口博史 2022.「境界変動地域の社会学に向けて」『地域社会学年報』34集、135-149

\* \* \* \* \*

## マジョリティ読者のための『移民のヨーロッパ史』

北岡志織

(大阪大学大学院人文学研究科講師)

本日は書評会にお招きいただき、まことにありがとうございます。大阪大学人文学研究科の北岡志織と申します。博士課程在籍時に大変お世話になった DESK に再び関わる機会を頂戴し、とても嬉しく思います。

私の専門は現代ドイツ文学・演劇であり、主にドイツ語圏の話劇中心の公共劇場が難民や移民の問題をいかに捉え、どのように表象しているのか、というテーマについて研究しております。世界的に大きく報じられたのは2015年夏以降のシリア難民の大規模な流入ですが、2012年頃からリビアやアフガニスタン等中東地域やアフリカから多くの難民が地中海を渡り、ドイツ語圏の国々に到着しました。2014年9月初演のハンブルクタリア劇場『庇護に委ねられた者たち』(*Die Schutzbefohlenen*、ニコラス・シュテーマン演出)以降、公共劇場が難民支援に乗り出し、難民問題を主題とする作品をたくさん制作するようになりました。これまでヨーロッパ文学中心であった公共劇場にとってこれは大きな変化です。さらに演劇的には素人の難民が「自分自身」として舞台に立ち、悲惨な逃避の経験を語るというドキュメンタリー的な作品も増えました。難民の流入はドイツ語圏の国々に政治・社会的な変化だけでなく、芸術的な変化ももたらしました。

私は歴史や政治については門外漢ですが、読者の一人として、この本を読んで私自身が学んだことや気になったことについてお話しさせていただければと思います。私の関心はとりわけ以下の点にあります。このもともとドイツ語で書かれた研究が、マジョリティであるドイツ語話者の読

者に対し、マイノリティである移民の歴史についていかに伝えるものであるか、という点です。書評会という場において本来は不適切かもしれませんが、私の専門である演劇の話も交えてお話しさせていただきたく存じます。何卒よろしく願いいたします。

まず、本書において目を引くのは、訳者の方々による充実した解説とコラムです。これらはドイツ語圏3か国における人々の移動の歴史と現在の難民・移民問題とを接続し、読者にアクチュアルな問題の要因を歴史から捉えることを促します。また、慎重な翻訳と、その訳語選定のプロセスまで書かれていることも本書の大きな特徴です。例えば、ビザを持たない移民について、「不法滞在者」ではなく、「記録のない者/証明書を持たぬ者」等、法的なジャッジの付随しないような訳語を慎重にあてられたということが書かれています(28頁)。移動する人々を表す言葉が、その移動の「自発性」(しかも自発性かどうかを判断するのは受け入れるヨーロッパ側)という恣意的な判断基準で使い分けられてきたことも強調されており、マジョリティ側の呼称がマイノリティのイメージの固定化を生む危険性について読者に注意を促しています。

次に興味深かったのは従来の移民史研究に対する批判と、それをいかに乗り越えるべきか、という課題についての記述です。例えば以下のような先行研究の問題点が挙げられています。

移民をある国民国家から他の国民国家に移動するエスニック集団として捉えてきたこと(32頁)/長期移民を重視し、一時滞在の移民についての研究はなおざりになってきたこと。また移民の結果を重視し、計画や意図の変化については十分に検討されてこなかったこと(54頁)/個別の移民集団の歴史に注目し、異文化との接触による文化変容プロセスの包括的検討が不十分であったこと。また移民第1、第2世代のみまでが研究の対象とされてきたこと(73頁)。

それらに対し解決策として以下のようなアプローチが挙げられています。移住のプロセスを細分化し考察する必要がある/計画の変更の可能性も検討する必要がある(54頁)。「統合」を長期にわたる漸進的・日常的な適応過程として見なす必要がある(73頁)/そして集団を硬直的に捉えて偏見を固定化することを防ぎ(74頁)、受け入れ側の国民国家の均質性の否定する必要がある(79頁)。

このように先行研究の問題点とそれを乗り越えるためのアプローチが示されますが、様々なケースに細分化して行う移民研究の難しさも示されます。例えば、移民過程を実証したり、再構成したりするためには、「利用しうるもの」といえば、しばしば匿名か集団的な統計資料に限られてしまう」「仮に個人のレベルで移民プロセスの情報を関連づけることができたとしても、その解釈は必然的に難しくな

る。年齢、性別、階級に特有の差異や人生の展望が存在し、異なる移民集団間の比較を困難にさせるからである」(54-55頁)という問題が指摘されます。このような移民史研究における資料と記述における難しさについては、東風谷さんによる解説部分でさらに「こうした限界を乗り越える資料としては、公的ないしは学術的な聞き取り調査や日記、手紙、自伝といった「エゴ・ドキュメント」を指摘しうる。(…)ただし、そこで語られる「自己」をめぐる語りを無批判に「事実」として扱うことができないのはいうまでもない」(94頁)と補足されています。

マジョリティによるマイノリティについての情報の収集と記述の難しさというのは、演劇においても見られます。これまでヨーロッパ文学中心であったドイツ演劇が、難民という「他者」を作品の主題として取り入れ始めたこと自体は意義があるものの、既存の他者表象では難民を硬直したイメージに押し込めてしまうのではないかという批判が数多くありました。その解決のために演劇界が利用した手段というのがまさに「エゴ・ドキュメント」の使用でした。先ほど紹介した『庇護に委ねられた者たち』以降、難民本人が舞台で逃避の経験を語る作品が流行しました。その際、俳優が難民を「演じること」はプレヒト的な意味で異化されました。難民自身の語りはオーセンティシティ(真正性)を生むとされ、俳優が難民を演じることの演劇性・人工性が強調されたのです。

当事者以外による代理表象についてはすでにアウシュビッツの表象で多く議論され、その結果当事者による「証言文学」や、裁判記録を用いた「ドキュメンタリー(記録)演劇」が生み出されました。ともに当事者性が重視され、代理表象が否定されたわけですが、このアウシュビッツの表象と難民の表象の議論で異なる点は、前者は当事者側から代理表象についての規制がかけられたのに対し、後者は主にマジョリティ側の芸術家たちが自ら規制をかけたという点です。このように難民という他者について知らせるための演劇でも、マジョリティ側によるマイノリティの硬直した集合的なイメージの生成回避のために、当事者の証言というエゴ・ドキュメントが用いられました。

さて、本書のタイトルに「移民のヨーロッパ史」とありますが、全体的にドイツ語圏における「マジョリティによる移民の搾取の歴史」に多くの記述が割かれていると感じました。例えばドイツでは領主たちによる人口増加政策として(106頁)、また東プロイセンなどの入植政策のため(109-110頁)に移民を積極的に迎えたのですが、受け入れ国の都合で数十年住んだ移民を突如強制送還し、第一次世界大戦中には彼らを帰国禁止にしてほぼ強制労働させるなどしてきた(122頁)ことが書かれています。オーストリアとスイスについても移民の待遇に差をつけて管理し、自国の利益のために都合よく利用していた歴史がそれぞれ丁

寧に記述されています。

また、排外主義・外国人嫌悪の歴史についての記述も注目すべき点でしょう。例えばドイツではナチ下での外国人雇用は、「外国人過多」の危険およびドイツ人民の純血への脅威と結びついていたこと（125頁）、DPsは戦後も「劣等人種」というナチの蔑称が引き継がれ、差別の対象となり、彼らによる暴力・掠奪の噂が一般化していたこと（135頁）、スイスでは19世紀の遍歴職人へのステレオタイプの偏見（230頁）やイタリア人移民に対する嫌悪（239-240頁）等、さまざまなマイノリティに対する差別の歴史が細かく書かれています。最近ではAfDが選挙用のプラカードにムスリム男性が白人女性を凌辱するイメージを用い、「異教」の他者に対する偏見と恐怖を煽ろうとしたことは広く知られていますが、本書ではこのような排外主義が何世紀にもわたり作り出され続けているものであり、決してナチが例外であったわけではないこと、幾度も政治的にも利用されてきたことが強調されます。

マジョリティ側の観客に、マイノリティに対する自らの加害の可能性や潜在的な差別意識と向き合わせようとする試みは演劇でも行われています。2015年12月に初演された、ドイツ劇場ハンブルクの『夢の船』(Schiff der Träume、カリン・バイアー演出)では、アフリカ系の人々が難民として舞台上に登場しますが、この演出における難民のキャラクターは、他の演劇におけるそれとは大きく異なります。ここでは難民はドイツ人女性に性的にアピールし、ドイツの支援を「うまく利用するよ」とにやりと微笑み、観客を挑発します。これまでドイツ語圏の演劇で様々な難民の当事者が出演しましたが、ほとんどの場合悲惨な経験を語りました。そのためこのような挑発的な難民の表象は観客に対して大きなショックを与え、この演出は多く批判されました。しかしここでの難民の言動はどれもマジョリティ側による偏見をなぞったものであり、観客は寛容な受け入れ国の一員というよりもむしろ、差別に満ちたマジョリティ社会の一員として難民問題と向き合うことを迫られるのです。

本書でさらに注目すべき点は、移民送り出し国としてのドイツ語圏3カ国の歴史についても記述されていることです。移民を送り出してきた歴史と移民を迎え入れる歴史について併せて記述している研究というのは大変珍しいはずですが、これは演劇でも用いられているアプローチで、ドイツ劇場ハンブルクで2014年に上演された『砂糖の国の大商人 & 光放つ迫害者』(Pfeffersäcke im Zuckerland & Strahlende Verfolger、カリン・バイアー演出)は、ドイツ系ブラジル人について扱っています。演出家のカリン・バイアーと俳優・スタッフのチームはブラジルに長期滞在し、第一世代から最新の第六世代までのドイツ系移民について調査し、集めたインタビューや資料の情報を凝縮させ、第一世

代から第六世代の架空のキャラクターを作り出しました。当時多くの劇場がヨーロッパ外から来た難民を取り上げ、その苦しみを描いていたのに対し、こちらではドイツから去った人々、ドイツ系ブラジル人の数世代にわたるアイデンティティの葛藤が描かれました。かつての同胞の同化への苦しみ・葛藤を描くことにより、観客の難民や移民に対する理解をより深めようとしたのではないかと考えられます。

このように本書は「移民史」として単にこれまでの移民の出身国やルート、定着状況のみに言及するだけではなく、マジョリティによるマイノリティに対する差別や迫害の歴史も丁寧に記述し、また移住という行為が決して一方的なものではなかったことを示すことにより、現代の難民・移民に対するマジョリティ読者の向き合い方にも働きかけるのです。本書では均質な国民文化という概念が繰り返し否定されますが、今まさに右派によって国民文化の保護が叫ばれています。演劇をはじめとする芸術界は2015年以降、一斉に難民問題に関与し始めますが、それに対して右派からの攻撃が相次ぎます。AfDは移民・難民を主題とした作品や移民の背景を持つアーティストの雇用についてしばしば議会で疑問を投げかけ、それらを理由として芸術施設への補助金カットや総監督の交代を提案し、さらには芸術の「ドイツ化」を要求しました。

例えば、2016年に発表されたAfDの基本綱領では、「AfDは、ドイツの主導文化 (deutsche Leitkultur) の側に立つ。AfDは多文化主義 (Multikulturalismus) というイデオロギーが社会的な平和と統一体としての国家の持続にとって深刻な脅威であるとみなす。これに対し、国家と市民社会は、ドイツの文化的アイデンティティを守らねばならない」と書かれています。このような時代であるからこそ、ますます「移民史」として「マジョリティによるマイノリティに対する差別や迫害の歴史」から、マジョリティやマイノリティを集合的に捉えることの危険性を学ぶ必要があります。

私のコメントの最後になりますが、増谷先生によるわれわれ日本読者へ向けられた言葉から、本書が日本語に訳された意義を確認したいと思います。

「こうした歴史を振り返ることは、極東アジアの島国に暮らす私たちにとってもけっして無関係ではない。本書の描き出す移動する人々の経験は、海に囲まれた「日本」ないし「日本人」の移民概念、移動する人々に対する意識、あるいは「日本人」の「国民意識」にも大きな刺激を与えるだろう。現に私たちも、戦争による国境の変化を経験してきたうえに、マジョリティによるマイノリティの生成、その「よそ者」呼ばわりも現実に行われているからである」(10頁)。

最後に質問と補足が3点ございます。まずは質問ですが、序章に「長期にわたる斬新的・日常的な適応過程としての統合」(73頁)、「緩やかつ徐々に遂行される同化のプロセス」(74頁)「同化をプロセスとして捉える長期的視座」(79頁)とあります。この書き手のいうところの「統合」「同化」の概念を理解することが難しかったので、もし可能であればご説明いただければ幸いです。

2点目は補足です。庇護権はドイツの過去への反省と深く結びついており、主に外国人のための権利である、というのがバーデの立場だと思いますが、例えば DESK 修了生の安齋耀太さんによる研究『ドイツの庇護権と難民問題』(三重大学出版会、2021年)は、そもそも庇護権が東方から帰還するドイツ人を守るためのものとして存在していたと論じており、この本に補足できるものかと思えます。

3点目はまた質問です。前田さんの解説では、職業訓練を受け、仕事を得的難民がかなり多いとのことですが、おそらくこれは2015年以降にやって来たシリア難民だと思います。その前にやって来たアフリカ出身者についてはどうでしょうか。もしご存じでしたら、お教えいただければありがたいです。

私からの質問は以上になります。ご清聴どうもありがとうございました。

\* \* \* \* \*

## 移民のヨーロッパ史：国境、第一次世界大戦、そして「外国人過多」からの考察

清水 謙

(立教大学法学部兼任講師)

### 1. 本書の位置づけと意義

移民研究は、ヨーロッパの地域研究において、もはや基幹分野と言ってよい研究領域である。ヨーロッパ地域を対象とした移民研究は、ヨーロッパ域外からの移民に焦点が当てられることが多いが、本書は「大陸ヨーロッパ」における「移動する人々」を三十年戦争にまで(あるいはそれ以前にも言及している)遡って分析した重厚な研究書である。本書は歴史学の方法論を採りながら、史料から統計を導き出し、詳細な移民に関する叙述をしている。本来、政治学、社会学などの社会科学の理論は、人文科学である歴史学の解釈を基に理論の抽出を図るのが本筋であるが、本書は人文科学と社会科学の両面に大きな知見を与えている。史料を緻密に検討して読み取った上で、立体的なヨーロッパ理解を提供している点で非常に興味深い内容となっており、移民研究にとって必携の著作といえる。同時に、

現在ヨーロッパで「移民問題」が重要課題になっているからこそ、まさに深く掘り下げた「移民史」の検討と見直しが求められているといえる。本書を読み解くにあたって、評者は三つのキーワードを示したい。すなわち、①国境、②第一次世界大戦、③「外国人過多」(Überfremdung)である。

### 2. 国境の移動と人の移動

本書でまず注目するのは、国境を越えて人が移動するだけでなく、国境がそこに住む人たちを超えて移動することもあるという点である<sup>1</sup>。とすれば、「移民のヨーロッパ史」と捉えるべきなのか、それとも「国境のヨーロッパ史」と捉えるかによって、仮に結論は同じになったとしても、分析の切り口は変わっていくのではないかと考えられる。第二次世界大戦の終結から、冷戦期に至るまで力による国境の変動はもはや主流の現象ではないことから、国境とは人が越えるものという認識が定着してきた。しかし、これまで国境の変動もしばしば見られることであった。最近の例として、ドイツ統一やチェコとスロヴァキアの分離が挙げられるが、ヨーロッパに衝撃を与えた事例として旧ユーゴスラヴィア紛争、そしてロシアによるクリミア併合とウクライナ侵攻がある。

ヨーロッパではたしかに、三十年戦争で大きな打撃を受けた地域において、「人口増加」を図ることが中心的な政策になり、特権や好条件を保障することで人口増加を促進した。他方、移住者(来住者)にとっても、そうした政策は社会的上昇の触媒であったことが指摘される<sup>2</sup>。領邦国家であれば、諸侯の支配領域の境界は意識されても「国境」は特に問われることもないままに、ヨーロッパ大陸での連続性による人の移動が生じたことは自然である一方で、もともと現地に暮らしていた、あるいは移住してきた民族集団の特殊な法的・文化的地位をめぐるやりとりは国民国家の誕生によって終わりを告げたという筆者の指摘は重要である<sup>3</sup>。

16世紀から19世紀までの「移民」は、本書が扱うドイツでもオーストリアでもスイスでも、官吏、聖職者、船員、工芸家、芸人、行商、修道士などと多岐にわたるが、基本的には特殊な技能を身につけた者、あるいは教養層のエリートたちが多くを占めてきたことが本書の分析から知ることができる。

ドイツでは重商主義的な就業と納税が可能な「臣民」の獲得が目指され<sup>4</sup>、オーストリアではヨーロッパ各地から移入してきた専門家集団の移住と定住が支援・促進され<sup>5</sup>、経済的かつ文化的な視点を軸にすると、宮廷、貴族官吏の労働移動も伴っていた<sup>6</sup>。スイスでは外国人は教育制度の発展に重要な役割を果たしており、外国人教授の割合は過半数にのぼり、21世紀まで高水準となっていたことが指摘され

ている。本書の呈示する「移民のヨーロッパ史」の中心を成した要素は、こうした移民の持つ高い社会経済的ステータスといってもよいだろう。20世紀には「国民労働市場」が謳われるようになるが、人の移動こそがヨーロッパの発展を支え、かつてのヨーロッパは越境によって労働市場が栄えてきたといえる。これは陸続きの「大陸ヨーロッパ」では自然な現象であり、それを「移民」と表現することができるのかどうか、とりわけ国民国家成立以前の人の移動を単に「移民」で括れるかどうかはさらなる検討の余地があると思われる。

### 3. 国境と国民国家

前節では、人が国境を越えて移動することだけでなく、国境がそこに住む人たちを超えて移動することもあったと指摘した。領邦国家では、支配領域によって境が変わり、民の頭上を国境が変動するようなことは繰り返されてきた。本書では、19世紀末頃になるとナショナル・アイデンティティの観念が、地域的・局地的な帰属性よりも大きな意義を持つようになったと指摘する。すなわち、「より高等な」もしくは「より下等な」民族、場合によっては「人種」という概念が文化的帰属による区別にとって代わった。その結果、労働力の輸入を望む国家と社会が、民族文化的、「人種的」もしくは「国民的（ナショナル）」に好ましくないとされた人々を排除しはじめようになった<sup>8</sup>。ここに、ナショナルで正統な成員にのみ平等が保障される一方で、国家内部では「国民（ネーション）」に帰属しないとみなされた文化集団は「マイノリティ」として劣位に位置づけられた。こうしたナショナリズムやマイノリティの自決権をめぐる問題の中で二つの世界大戦が勃発した。

第一次世界大戦は、古い帝国の解体に帰結したといえよう。しかし、これによってすべての人々に国家が与えられたわけではない。バルカン史の泰斗マーク・マゾワーによれば、ヴェルサイユ講和条約は6000万の人々に国家を与えた一方で、2500万人をマイノリティにしたと指摘している<sup>9</sup>。国民国家の成立を頂点に迎えようとする中で、大規模な国境の変動があったわけであり、新たな国民国家の成立によってそこに住む人々の頭上で再び領土が拡大、あるいは縮小するなど国境の変動が生じた。これはオーストリア＝ハンガリー帝国にとどまらず、「柔らかな専制」で知られるオスマン帝国でも同様であったが、「古い帝国」の統治原理は「民族」ではなく、帝国の抱える「多民族」ゆえに、忠誠や包摂が支配原理となって、民族横断的な統治機構という装置の中で機能していた。

では、こうした「古い帝国」は第一次世界大戦で完全に消滅してしまったのだろうか。そうではなく、その「古い帝国」であるオーストリア＝ハンガリー帝国は新たに成立したソ連に継承されているという視点を示すことができる

とマゾワーは示唆している。オーストリア＝ハンガリー帝国でもオスマン帝国でも、中央集権的なシステムの中で、民族や出自には関係なく忠誠と包摂によって出世回廊に乗った者が螺旋状に上昇することができたが、第一次世界大戦は「古い帝国」を解体させたとはいえ、新たに誕生したソ連はこうした旧来の統治形態を内包したとされる。もちろん、本書が指摘するようにソ連の行った強制移住や被追放民を忘れてはならないが、スターリンを筆頭とするソ連の指導者たちがさまざまなエスニシティのバックグラウンドを有していたことはこれを裏付けている。マゾワーは、ソ連がエスニシティの複雑さを連邦制という形で解決しようとし、中央集権的な共産党による党支配の中で、政府と行政への参加により政治権力を、社会革命による共通の利益を享受する経済権力を、そして教育を通して文化的権力を人民に付与して非ロシア系住民を取り込んでいったと指摘している<sup>10</sup>。その意味で、ソ連はオーストリア＝ハンガリー帝国を継承しているとマゾワーは言う<sup>11</sup>。また、同じく多民族国家であったユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国もこれに類似するが、ドイツ語圏の研究視点からこうしたマゾワーの見方が妥当なのかどうかは批判も含めて、一考の価値があるかと思われる。また、本書を通して時代の区分／境界を設定するとすれば、それは第一次世界大戦であり、そして大戦そのものよりもその帰結こそがヨーロッパにおける「移民史」の劇的な転換点と捉えられるのではないだろうか。そして、それが転換点だとすれば、それは「国民国家の堅牢化」と、これまでのヨーロッパに見られた国境の安定化によって、「要塞としてのヨーロッパ」を説明できるのかも併せて検討しなければならない。

### 4. 「外国人過多」と排外主義

本書では、「外国人過多」という表現が登場する<sup>12</sup>。この表現は主にスイスの事例で取り上げられているが、移民研究においては、外国人人口が全人口の2%を超えるとホスト国で「外国人が多い」と意識され、外国人施策が必要になると言われる。本書で登場する統計では、外国人人口が少ないとされるオーストリアでも「2%と安定している」とされるが<sup>13</sup>、19世紀もしくは20世紀初頭までの外国人人口はかなりの割合であったと思われる。旧ハプスブルク帝国領ないしそれ以外の国々からやってきた外国人の扱いはさまざまな形態を取っていた。優遇が認められる一方で弾圧が加えられることもあり、「同胞」外国人と「よそ者」内国人の区別が強化され、人工的・作為的な疎外意識を植え付ける矛盾に満ちたシステムが居住権の厳格化を通じて強化されたことで排外主義が生まれたと本書は指摘する<sup>14</sup>。「外国人過多」の問題は、現代ヨーロッパが抱える問題点としても議論されるが、19世紀もしくは20世紀までは

問題にはならなかったのかという疑問が生じる。

本書では、オーストリアは世界的規模の移民に関してはほとんどその影響を受けていないと指摘している<sup>15</sup>。それでもなお、1990年代以降、統合推進政策が採られたにもかかわらず、現代的な問題として移民が都市内の安価な居住地区に住むことで隔離が生じて、社会生活の領域においては移民と地元民の接触・交流は限定的であると述べている<sup>16</sup>。とすれば、ここでいう「隔離」は現代社会学でいうところの「セグリゲーション」と捉えることもできる。都市社会学においても移民問題は都市部における現象であることを示しており、これは現代のヨーロッパ全体にも符号する問題である。

こうしたセグリゲーションは移民とホスト国民との社会的な分断だけでなく、さまざまな深刻な社会問題をも引き起こしている。たとえば、ヨーロッパで最も治安のよい国のひとつと言われてきたスウェーデンでさえ、いまでは年間300件以上の発砲事件が起こり、死者と負傷者数は史上最悪の状況にある。解決の見通しは立っていないが、「セグレートされた地域」をどのように統合していくかが喫緊の課題となっている。スウェーデンの外国人人口の割合（正確には外国のバックグラウンドを有する者の人口割合）は25%超とヨーロッパでも突出している国のひとつであるが、これは戦後から1972年までに招致した外国人労働者と「積極的外交政策」の一環として移民／難民を受け入れたことによるものである。しかし、大規模な移民と難民の流入に反感と危機感を持つ人たちが結集することで、スウェーデン民主党（1988年結党）をはじめとする多くの極右政党・団体が群雄割拠していった。スウェーデン民主党は着実に支持を拡大していき、2010年に議会で初議席を得て、2022年9月の国政選挙で第二党となった。本書が取り上げている国々を見ても、オーストリアでは「自由党」（FLÖ）がイェルグ・ハイダーの登場が追い風となって90年代に右派ポピュリストとなり<sup>17</sup>、スイスでは「スイス国民党」（SVP）が反移民・反外国人政策を掲げて既成政党を批判する右派ポピュリスト政党へと急転回して支持を集めていった<sup>18</sup>。ドイツでは2013年に「ドイツのための選択肢」（AfD）が結党され、2021年に連邦議会で議席を得た。いずれも移民を脅威と捉えている点で、移民が安全保障上の脅威となる「移民の安全保障化」が背景になっていると考えられる。

## 5. おわりに

本書では、「移民のヨーロッパ史」として地理的概念の「中欧」のドイツ語圏に焦点を当てて、移民の受け入れ国ばかりでなく、かつては移民送り出し国であったことにも触れながら、ヨーロッパが人の移動によって発展してきたことを論じている。本書で見てきた「移民史」は、過去の

ものとして現代の移民問題とは切り離されるべき「断絶」があるのか、それともその延長上にある「連続性」が見出せるのかという問題も提示しているように思われる。「移民史」から見るヨーロッパ論は、現代のヨーロッパをどのように捉えるのか、そして現在のヨーロッパの「移民／難民問題」について考える際に大きな指針を与える一冊となっている。

<sup>1</sup> クラウス・J・バーデ編（監訳：増谷英樹・穂山洋子、訳：前田直子・藤井欣子・鈴木珠美）『移民のヨーロッパ史 ドイツ・オーストリア・スイス』東京外国語大学出版会、2021年、9頁。

<sup>2</sup> バーデ、前掲書、106頁。

<sup>3</sup> バーデ、前掲書、65頁。

<sup>4</sup> バーデ、前掲書、106頁。

<sup>5</sup> バーデ、前掲書、188頁。

<sup>6</sup> バーデ、前掲書、183頁。

<sup>7</sup> バーデ、前掲書、232頁。

<sup>8</sup> バーデ、前掲書、37頁。

<sup>9</sup> マーク・マゾワー（中田瑞穂・網谷龍介訳）『暗黒の大陸 ヨーロッパの20世紀』未来社、2015年、65-67頁。

<sup>10</sup> マゾワー、前掲書、75頁。

<sup>11</sup> マゾワー、前掲書、73頁。

<sup>12</sup> バーデ、前掲書、125, 242, 248, 261頁。

<sup>13</sup> バーデ、前掲書、191頁。

<sup>14</sup> バーデ、前掲書、195頁。

<sup>15</sup> バーデ、前掲書、208頁。

<sup>16</sup> バーデ、前掲書、209頁。

<sup>17</sup> 水島治郎『ポピュリズムとは何か 民主主義の敵か、希望か』中公新書、2016年、77-79頁。

<sup>18</sup> 水島、前掲書、134頁。

## 【参考文献】

マーク・マゾワー（中田瑞穂・網谷龍介訳）『暗黒の大陸 ヨーロッパの20世紀』未来社、2015年。

水島治郎『ポピュリズムとは何か 民主主義の敵か、希望か』中公新書、2016年。

\* \* \* \* \*

## リプライ&ディスカッション

川喜田 それでは、時間がまいりましたので、リプライとディスカッションの部に移りたいと思います。今日は本書の翻訳者として、東風谷太一さん、前田直子さん、藤井欣子さん、鈴木珠美さん、穂山洋子さんの5名の方々にお越しいただきました。

本書の成立にあたって中心的な役割を果たされた増谷英樹先生も本日の書評会にお越しくださっていますけれども、評者の挙げてくださった論点、このあと皆さまからお受けすることになるご質問へのリプライについては、直接的には、増谷先生のお弟子さん方の世代にあたる、先ほどお名前を挙げました5名の監訳者・翻訳者の皆さまにお願いできるとかがっております。



それでは、まずは東風谷太一さんから順にリプライをお願いしますと思います。東風谷さんは、本書では『用語解説』をお書きになっていて、「移民研究における術語と概念の変遷」と題された序章に対して訳者解説も付けていらっしゃると思います。概念については、北岡さんからもコメントがあったところかと思いますが、それではどうぞよろしくお願いたします。

東風谷 よろしくお願いたします。一橋大学の社会科学古典資料センターで助教を務めております東風谷と申します。本日はこのような非常に貴重な書評会を催していただきまして、川喜田さんをはじめ石田先生、それからコメントをいただいた3名の先生がたにお礼をまず申し上げますと思います。実はもう三月に書評会を別の所でやっていたのですが、そのときは全く異なる角度から、歴史学と文学、政治学の立場から非常に鋭いコメントをいただき、今どう答えればいいのか迷っていたところでした。私は本来、19世紀の都市の社会運動とか、ビールを中心にアルコールの文化、飲酒文化、飲食文化について普段勉強していますので、時代的に私がお答えできそうなところを中心に、若干恣意的になってしまっていますが、いくつかコメントに対して簡潔にリプライさせていただきます。

まず、北岡さんと清水さんからいただいた質問の中で、どちらかといえば細かい部分からお答えいたします。まず北岡さんから、本書の74～76ページ辺りに書いた、統合と同化という概念がどう変わったのかが分かりづらいというご指摘をいただきました。結論から申しますと、非常に無責任な発言で申し訳ありませんが、私もこれがどういふふうに変ったのかというのははっきりとは分かっておりません。ただ一つ申し上げられるのは、原著でこの章は3名の共著になっていることから間接的に読み取ると、従来の同化と統合という概念は、どちらかといえば目的論的でした。例えば、選挙権を得ればアメリカの民主主義社会に同化されるというような想定がされてきました。そういった意味で目的論的で単線的であったものを、もうすこし重層的で動態的なプロセスとして捉えようという意味で使っていると私は受け止めております。

それから清水さんからは、航空機による国際移民が何をイメージしているのかということをご質問いただきました。これも私は原著者たちが具体的に何をイメージしていたかということ、はっきりとはお答えしかねます。ただ、どちらかといえば現代の文脈でガストアルバイターなどをイメージしていると思われます。例えばこの本には、今、タイトル忘れちゃったんですが、穂山さんが初学者向けの参考文献をつけてくれました。そのなかに映画の項目も入っているんですが、ガストアルバイターをテーマにしたものも含まれています。そこではドイツの地を踏んだト

ルコからのガストアルバイターは飛行機から降り立つものとして表象されていたと思います。そういった意味で、国際移民が飛行機を使うというイメージには、トルコからのガストアルバイターが第一にあると個人的には考えております。

それから衣笠さんからは、前近代と近代、つまり、国民国家の成立前後での移民には違いがあるのか、国民国家と移動の間に相性の悪さがあるのかについて聞いていただいたと思います。まず、私は18～19世紀の職人の移動なんていうのを勉強してきましたが、その職人を例に取れば、やはり前近代と近現代で差異があるように思います。職人は遍歴の旅、修行の旅に出ますけれども、その後故郷に戻ってきて開業する親方になる、独立するという例が相対的に多いように私は受け止めています。それに対して、今挙げたトルコ系のガストアルバイターを例に取ると、現代のほうが定住し世代をつなぐという傾向が見て取れます。そういった意味で、違いを見いだせるのではないかと思います。

それから同じく衣笠さんから、境界の移動を論点に組み込んだほうが良いのではないかとご指摘がありましたが、これには全面的に同意します。これは本書の訳者解説や、増谷先生による序章で指摘されていますが、境界の移動そのものも非常に重要な論点だと思います。そうした意味で、清水さんからのご質問にも間接的にお答えできると思いますが、第一次世界大戦は移民にとって一つの大きな画期だったと私も思います。

清水さんからは、国民国家の堅硬化というご説明がありましたが、そういった側面ももちろん見いだせます。私からあえて付け加えることがあるとすれば、川喜田さんの『東欧からのドイツ人の「追放」』を念頭に置くと、国民国家イデオロギーの追求が、特に中東欧に関しては、第一次世界大戦後に非常に急進化、先鋭化したと思われます。それに伴う「民族」と「人種」概念および国境変動も先鋭化しました。これらを背景にこの時代は、人の異動や移民にとって大きな転換点になったと言えるかもしれません。そのため第一次世界大戦が、人の移動、移民に対して持ったインパクトは、もう少し広く深く議論されてもよいと個人的には思いました。

それから最後に、清水さんからいただいた、非常に長期的に見て移民という概念でくくってよいのかという質問に入ります。これは視点の取り方次第でそう取ることもできると私は思います。例えば、清水さんご自身からご指摘があったように、労働市場から見ると、職人の遍歴は非常に理解しやすいです。それから19世紀に人口増加を経験したドイツが主に北アメリカへと移民を送り出した現象は、労働力移動として捉えることができます。こういった視角は、現代までも広く包含して考察できるようなものなので

はないかと考えております。

雑ばくですが、ひとまず私からは以上です。

川喜田 東風谷さん、どうもありがとうございました。続きまして、次は前田直子さんにお願いいたします。現在、前田さんはドイツのベルリンにお住まいで、今日は、無理を押し、朝早くからご参加いただいています。本書ではドイツの移民・難民政策の現状について訳者解説をお書きになっています。解説で書かれていた2015年以降のヨーロッパのいわゆる「難民危機」を受けての動向、それに加えて現在のウクライナ難民に関する問題については、評者からのご質問もいくつかありましたし、皆さんのご関心も高いテーマかと思えます。どうぞよろしくお願ひいたします。

前田 このたびは本当にありがとうございました。増谷先生からこの本の一部を翻訳するという構想のお話をいただいたのが2013年でした。その後、欧州の難民危機、新型コロナウイルスのパンデミック、ロシア・ウクライナ戦争などを通じて、人の移動が非常に大きなテーマになっている中で出版されたことと、こういった人の移動を議論する土台となるような本が出版できたこと、そこに参加させていただいたことは、本当にありがたいと感じています。

私個人はこの間、研究らしいことは、実はあまりできていない状況にあります。ただドイツに2013年から住んでいる中で、自分がこれまで関わってきた移民というテーマ、排他主義、外国人過多、統合、選別、安全保障といったテーマは、常に意識している問題でもありますので、それらについて簡単にお話しできたらと思っています。

統合、移民難民の選別、安全保障に関しては、2005年の「移民法」が大きいと感じています。というのは、この法によって、これらがシステム化されたからです。例えば、統合コースが導入されたことで、統合のスタイルが形作られました。その対象となる人の基準も定められました。逆に脅威と見なされ、ドイツが望まない人物に対しては、安全保障という観点から早くに国外追放できるようになりました。2015年の欧州難民危機はドイツにとって大きな挑戦ではありましたが、移民法以後の10年間の積み重ねがあったからこそ、苦しいながらもなんとか乗り越えられたのだと思います。その経験は、近年の大量のウクライナ避難民の受け入れにも役立っているはずですよ。

排他主義や外国人過多に関しては、生活レベルでは見た目の問題が非常に大きいと感じます。現在、ウクライナ避難民たちがドイツに大量にやって来ています。ベルリンにも多くの人たちがとどまっていると聞いていますし、実際、ウクライナナンバーの車をよく見かけるようになりました。けれど、見かけではウクライナ人だと特定できない彼らは、脅威の対象にはなりません。一方、見かけが明らか

かに外国人の私は、何年ドイツに住んでも外国人のままですし、生まれも育ちもドイツ生まれの私の友人は、アフリカ系であるがゆえに何度も嫌な思いをしたそうです。

日本はといえば、新型コロナ対策として外国からの入国制限を非常に厳しくしたことから、また、その政策を多くの人が支持したことから、悪や害は必ず外から持ち込まれる、という考えが根強いという印象を受けました。日本でも多文化共生が謳われて久しいですが、まだまだ人々の中に、外のものを受け入れる素地が出来上がっていない、と感じました。その意味では、日本が今回、ウクライナ避難民を受け入れたことをきっかけに、外から入ってくる人たちに対する耐性ができ、受け入れ態勢全体のレベルアップにつながればいいなと思っています。簡単ですけども、最近、私がドイツにいながら感じていること、この本を通して考えたことをお話しさせていただきました。ありがとうございました。

川喜田 前田さん、どうもありがとうございました。続きまして、藤井欣子さんは、本書第4章「東欧、東中欧、南東欧からのドイツ系避難民および被追放民たち」を訳されました。藤井さんはオーストリアがご専門ですので、そのお立場からもご発言をお願いできるかと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

藤井 ありがとうございます。ご紹介いただきました藤井と申します。東京外国語大学で、現在ダブルディグリープログラム担当の特任助教をしております。パートナー校は、皆さんご存じかもしれませんが、ハンガリーのブダペストとウィーンにキャンパスを持つ中央ヨーロッパ大学(CEU)です。もともとの専門はオーストリア史ですが、とりわけ第一次世界大戦前後のシュタイアーマルクという、オーストリアとスロベニアとの国境地域を主な対象としております。

本日、三名のかたがたから鋭い指摘と、現代的な視点も盛り込んだ面白いお話を聞かせていただき、本当に勉強になります。私はシュタイアーマルクというオーストリアとスロベニアの国境地域の勉強をしておりますが、その地域から定点観測すると、国境というものは、戦争の結果いきなり作られて人々の生活を分断するといった形で、動くものということがよく分かります。ですので、ここに注目するという点には本当に共感いたしました。

私が最後にヨーロッパに行けた2018年には、グラーツというオーストリア第二の都市でありながら人口が25万程度の小さな街の歴史博物館で、三回に分けて、ある展示会が行われていました。展示会のタイトルは「国境100年」というもので、第一次世界大戦の結果として引かれた国境線と、分断された地域住民たちの生活を、写真の展示を中心

に紹介するものでした。この内容を見ると、彼らのローカルな意識の中に、いかに国境があらわれ、生活の中に根付いていったかが示されているように思いました。この展示会の趣旨は「国境100周年を記念して振り返る」というようなことで、おおむね歴史的経緯をずっと追うかたちで写真が並んでいました。写真を補足する文字情報として、国境が引かれる以前はドイツ語系住民やスロベニア語系住民といった言語を核とするアイデンティティーがあったことも記述されていました。ですが当時は、地域住民はこういった言語的・文化的な垣根を越えて買い物をし、学校や職場、教会に通っていました。例えば農作業のときの人手の貸し借りが行われていましたし、その農作業のときのスナップ写真を展示して、誰がドイツ人かスロベニア人か見ただ目で分かるか？みたいな感じですね。そういった生活は国境によりいったんは分断されたのでした。しかし、2018年時点での展示会としてどこにオチを持っていくかという、やはりそういった分断を経ての「共生」にフォーカスしていました。オーストリアもスロベニアもEUに加盟していますから、今国境というのは便宜上あるけれども厳格なものではありません。

ただ、これはあくまでコロナ禍以前の展示会であり、共生という理想のお話でした。先ほど少し出てきた見目の問題と共生とも少し関わるのかもしれませんが、やはりコロナの影響で、国境は簡単に閉まるということを感じています。私はいま日欧にまたがるダブルディグリープログラムの担当をしていますが、学生にビザを取らせ国境を越えて移動させることが、本当に難しくなっていると感じています。国境というものが、人の移動に再び重くのしかかっています。一時、緩んでいたものが、ぐっと潮目が変わったと感じています。コロナ禍が終わってこれがどこまで戻るのかは、まだ未知数です。

それから、第一次世界大戦を一つ区切りとするのではないかという指摘にも非常に共感しました。私が専門とする時代でもあるということもありますが、第一次世界大戦はやはり戦争としての呼称がまず国ごとに違うということが指摘されます。英語では、**The Great War** というと、第一次世界大戦を指します。大戦争というようなこの呼称からして、意識の上で一つ、核となる存在になっていると感じています。この時代に、効率を追求してさまざまな規格（列車の線路の幅や紙の大きさ、銃や弾のサイズなど）が決められ、それらが現代の社会にまで使われていることも、時代を画しているといえると思います。

それから *Überfremdung* という言葉についてですが、増谷先生のオーストリアに関する授業で、1990年代にハイダーが自分の政治的勢力をこの語句を使って拡大していったというようなことを習いましたので、皆さんと共有したいと思います。

また後で議論があると聞いておりますので、そちらのほうでいろいろ参加できたらと思っております。ありがとうございます。

川喜田 藤井さん、どうもありがとうございます。続きまして、鈴木珠美さんをお願いしたいと思います。鈴木さんは本書第5章「南ティロールに居住しているイタリア人」に関する部分を訳されました。鈴木さんご自身が、南ティロールのドイツ人マイノリティを対象に研究をされており、マイノリティの側に注目して歴史を見るという視点をお持ちかと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

鈴木 本日はこのような機会を設けていただきましてありがとうございます。私は南ティロールという、オーストリアとイタリアの国境地域に関心を持っております。このポスターの自己紹介では、オーストリア・イタリア史としていますが、正確にはオーストリアと、イタリアの国境地域の歴史ということになります。私は、ドイツ人マイノリティ集団、ドイツ語集団に着目して、南ティロール地域の歴史を追ってきました。特に関心を持っているのは、本書でも扱われている、主にドイツ語やラディーン語の言語集団を対象として、国籍を選択させ、その国籍に応じたいずれかの領域への移住を選択させるという、1939年から数年にわたって展開された政策です。

本日は三人の評者のかたに、広い視野かつ洞察に富んだご指摘をいただきました。あらためて感謝申し上げます。それぞれの評者の方の論点を私なりに抽出して、順にリプライさせて頂こうと思っております。衣笠さんからは、国境自体が住民の上を移動するとの観点がありうるのではないかとのご指摘でした。そうした視点も必要であることには私も同意します。南ティロールのドイツ語集団に関して言えば、清水さんにキーワードとして出していただいた「第一次世界大戦」によって国境が定まり、ドイツ語話者が、北岡さんのキーワードである「マジョリティ」として、イタリア国内に相当数の言語の異なる集団が存在するようになった地域が南ティロールと認識されるに至った経緯があります。南ティロールという地域設定に立脚し、そこで多数を占めるドイツ語話者集団を主体とする地域史が叙述されてきました。

さらに1939年の国籍選択においては、およそ25万人が選択に参加しました。統計の取り方によって幅はありますが、その内約86%の人々が、ドイツ国籍とそれと組み合わせられていたドイツ領内への移住を選択したとされます。ただし、実際にその選択に従って移住したのは、これも統計によってばらつきがありますが、およそ三分の一である7万5千人程度にとどまりました。残り三分の二の人々は

ドイツ国籍を選択しながらも、その国籍に伴って想定されるドイツ領内への移住を行わずに、そのままイタリアの領域にとどまりました。結果的にこれらの人々は、国境の変更による行政制度や政策の変化、そして社会の変容をイタリアに残って体験した集団となります。

こうした経緯は、私が翻訳を担当した部分でも触れていますが、丁寧に読み取っていただき、ありがとうございます。また、欧州各地をフィールドとした文学、歴史学、社会学の各分野における新しい研究動向にも言及していただきました。複数の言語集団が共存し、国境線の変更を経験し、さらに住民の集団移住が部分的であれ実施されたという、南ティロール地域の20世紀前半の歴史を考察するうえで、重要な示唆を得ることができました。

北岡さんにも多くのご指摘をいただきました。マジョリティ側に属する書き手が、マジョリティとマイノリティが混在する読者に向けて「移動する人々の歴史」をどのように書くのかというところに、私は非常に興味を惹かれました。私が研究対象としているドイツ語集団というのは現在、行政上は県の地位にある南ティロールで、人口構成の上ではマジョリティです。しかし、イタリア全体から見れば、数の上でも、政策決定上も、マイノリティ集団です。国際的には、イタリアが、ドイツ語話者であるマイノリティの権利を国内で保障していくかということが課題となります。マジョリティとマイノリティの在り方が交錯します。

これまで私が南ティロールについて研究してきた点および本書に訳出されている点に加えて、北岡さんのコメントにより視野を広げることができたのは、マジョリティとマイノリティを巡るダイナミズムに関する点です。政策上どちらがマイノリティで、マジョリティなのか、歴史研究のなかでどのように語られていくのかという点もまた、重要であると感じました。北岡さんには、演劇の側でマジョリティの側が描き出す表象がどのように社会に敷衍されていくのかという点を、詳しくお伺いできればありがたいと思います。

清水さんからは第一次世界大戦を画期とした時代区分を移民に設定できるか、言い換えれば戦争の前と後で断絶があるのか、連続しているのかという趣旨のご質問がありました。これも示唆に富む観点だと思います。そのような観点からの移民研究という点が、私の担当個所では読者に十分に伝えられていなかったというのが率直な感想です。今後の課題とさせていただきます。

川喜田 鈴木さん、どうもありがとうございました。北岡さんに対する再質問も出ていましたが、まずはいったん、穂山さんにご発言の機会をお譲りしたいと思います。穂山さんはスイスのユダヤ人問題がご専門で、本書では第Ⅲ部

「スイス」の部分について訳者解説をお書きになっています。増谷先生、東風谷さんとともに、監訳者として本書をまとめる上で大事な役割を果たされたとうかがっております。どうぞよろしくお願いいたします。

穂山 よろしく申し上げます。同志社大学の穂山洋子です。私はスイスの近現代史を研究しております。最近は青少年に対する福祉政策の中で、子どもたちがどう矯正教育されたのかとかいう問題と、戦間期のユダヤ人の問題という二つの軸を中心に研究しています。本日、本当に丁寧に本を読んでいただいて、非常に興味深い重要な論点をたくさん挙げていただいた三人の先生がたに心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。全てにお答えするのは非常に難しいので、私の関心に沿っていくつかお話をさせていただきますと思います。

まず、清水さんと衣笠さんからは、国境が動いただけで自らは動いてない人たちも移民の歴史叙述に含めるべきであり、「国境のヨーロッパ史」というものも考えられるのではないかという提言がありました。スイスに関して言えば、他の地域に比べて歴史的に国境はあまり変動していません。ただし、国境が重要な意味を持つときと、持たないときがありました。第一次世界大戦がその転換期です。

スイスは、国境はあるものの、清水さんもおっしゃっていたように陸続きですので、近隣国と簡単に行き来できます。歴史的にみても、例えばバーゼルは、ドイツとフランスと一つの経済圏を形成してきました。またザンクトガレンという地域は、隣接するオーストリアと密接につながっていました。例えば、19世紀のザンクトガレンのユダヤ人解放問題には、オーストリアのホーエネムスのユダヤ人たちが尽力したということもあります。このように国境がそれほど意味を持たないときもあります。

しかし、国境が非常に重要な境界線になるのが、やはり戦争と、今回、私が強く感じたのはパンデミックの時です。コロナ禍でスイスでも国境管理が厳しくなり、越境労働者の人たちが簡単に入国できなくなりました。それが国内経済、特に病院で人手が足りなくなり、医療体制に大きな影響を与えました。このように移動するといってもさまざまな種類があります。この本でも指摘されていますが、単線的ではなく、越境労働者のような一日単位の短期的な往来をする人たちにも注目する必要があると思います。

こうしたことから、国境が非常に重要な境界線になるときに、ならないときがあることに注視することが必要になってくると思います。

二点目として、第一次世界大戦が移民の転換点かという清水さんからのご指摘についてです。スイスの場合、まさしく第一次世界大戦は大きな画期です。19世紀後半に都市

を中心に非常に工業が発達したスイスでは、外国人労働者を受け入れたことで、外国人が急増します。1850年には2.9パーセントだった外国人の割合が、1910年には14.7パーセントまで増える中で、第一次世界大戦以前は市民権を付与して外国人をスイス人にするという対応が検討され始めます。外国人を政治的なネーションに包摂させ、その数を減らそうとするのです。

しかし、第一次世界大戦勃発以降、外国人に対する警戒心が高まり、スイス人になれる人と出来ない人の線引きが行われるようになりました。1917年に連邦外国人警察が設置されて、外国人管理が強化されました。この管理の対象になったのが、東欧ユダヤ人、脱走兵、兵役拒否者、ポリシェヴィキでした。これ以降、スイスは外国人を管理するという方針をとるようになり、第二次世界大戦中にはユダヤ人を政治難民として受け入れず、二万人以上のユダヤ難民を国境で追い返しました。こうしたことから第一次世界大戦が移民の転換点になったという清水さんのご指摘とおりのと思います。

三点目に「外国人過多 (Überfremdung)」という概念についてご指摘いただき、ありがとうございます。これは私の研究の出発点でもあります。外国人過多という訳語は、増谷先生と相談して決めました。この語は「外国人過剰」と訳されることもありますし、「外国人からの過度の影響」と訳されることもあります。

皆さんもご存知かもしれませんが、この言葉は1993年にドイツで粗悪語にも選ばれています。スイスでは、1900年頃にこの概念が使われ始めたと言われています。この背景には、先ほどお話ししたように、外国人に関する議論で数が増えているから減らそうという上層の人たちの議論がありました。うまく行きませんでした。その理由は、市民権が *Heimatrecht* (居住権) と関わっているということがありました。市民権と一緒に「居住権」は救貧と関係していました。居住権を持つ人が窮地に陥ったときには経済的な支援が必要になりますが、支援の権限を持つ地方自治体はお荷物になるような外国人の大量受け入れに反対してうまくいきませんでした。

第一次世界大戦後に行われた「外国人過多」の議論では、スイスに受け入れられる者と受け入れられない者の線引きが焦点になりました。この概念は非常に伸縮性があるため、何が外国人過多の状態、よそのもの (Fremd) とはだれなのかということは議論されないまま使われていきました。その後、1960年代と70年代にイタリアから労働者が来たときに再び外国人過多に関する議論がありました。

最近粗悪語に選ばれたためか、この言葉は使われず、代わりに「*Massenmigration*」や「*Masseneinwanderung*」、つまり「大量の移民」という言葉で語られることが多くなりました。ただ、スイスの場合は、ほとんどの外国人が

EU か EFTA 加盟国から来ているため、いわゆる非常に異質なものを持っている人は少ないと言えますが、そのような人たちが現れた場合、攻撃の対象になります。

そして、北岡さんからは、その外国人労働者の歴史における移民の利用という鋭いご指摘がありました。本書はやはりマジョリティーがマジョリティーに向けた歴史叙述なので、反省すべき点が含まれていると私は思います。当時は当然のことのように行われていたことが、現代的な視点からみれば外国人の排除と搾取であることが、おのずと含まれている叙述になっていると思います。

それと併せて、送り出し国でもあったという視点も必要だというご指摘がありました。送り出された人たちが移民先でどう扱われたかまでは本書で叙述されていません。例えば、スイスで最近話題にされるのは、ウクライナにワイン農家として移住した人たちについてです。その人たちはとうの昔にソ連軍によって追放されてしまい、他の場所に移住しているにもかかわらず、ウクライナには実はスイスの農民たちがつくった素晴らしいワイン農家の文化が根付いており、そこが今や侵害されそうになっているといった語りになされることがあります。非常にポジティブに語られていますが、実はワイン農家の人たちも移民先で外国人排除などを経験しているかもしれないため、そうした両面を並列して語らないと、なかなかバランスのいい語りにならないと、先ほどの北岡さんのお話を聞いていて思いました。以上、取りあえずお返しいたします。ありがとうございます。

川喜田 穂山さん、ありがとうございます。論点をつなぎながら析出していただいたことで、だんだんに議論の焦点が見えてきたように感じます。今日は、多くの方が議論をここまでお聞きくださっています。評者、訳者のどちらに対してでもかまいませんので、何かご質問やコメントなどのご発言の希望がある方は挙手をお願いいたします。今、北岡さんから手が挙がりましたのでよろしくお祈いします。

北岡 先ほど鈴木さんからご質問いただきましたので簡単にお答えいたします。鈴木さんからいただいた質問は、ドイツのマジョリティー側がマイノリティーの表象をこれから劇場でどう敷衍させていくかというものだったのでしょうか。

鈴木 ありがとうございます。趣旨はそうですが、北岡さんが報告で取り上げてくださった、作品、演劇がどのように受容されているのか、どう社会に影響を与えているのかについてもう少し詳しく伺いたいと思いました。

北岡 ありがとうございます、最初にお見せしたハンプルク版『庇護に委ねられた者たち』という俳優と難民が同じステージに立つ演出は、非常に高く評価されました。その理由は、このような作品が公共劇場で上演されたということにあります。公共劇場は収入の八〜九割程度を税金が占めており、そこで働く人は基本的に公務員扱いです。演目はヨーロッパ文学、とくにドイツ文学中心であり、外見が「ヨーロッパ的」であるドイツ語母語話者を専属俳優として多く雇用する傾向があります。その中で演劇的に素人のアフリカ系難民を舞台に上げ、彼らに自身の逃避経験を語らせたことで、彼らの「生の声を伝えた」として非常に高く評価されました。

しかし、この演劇があまりにも話題になり過ぎたために、その後ドイツ演劇界では、難民問題を扱う際には必ず難民を舞台に上げるべきではないか、難民と経験を共有していない俳優が難民を代理して演じることは難民の仕事と立場を奪ってしまうのではないかと、といった議論がなされました。そしてさらに時間が経つと今度は、難民を正規に雇用せず上演の間のみ雇うことは当事者性・他者性の一時的な「利用」ではないかという議論も起こるようになります。

『庇護に委ねられた者たち』の一年後に上演されたのが次にお見せしたハンプルク版『夢の船』ですね。この作品でもアフリカ系の人々が難民として舞台に上がりましたが、この演出で難民は、ドイツ人を脅かす存在として表されました。「こんなふうには難民を描くことは許せない」ということでたくさん批判された上演です。しかしよく見てみると、悲惨な境遇について難民が語ることを無意識的にいつも期待するようになってしまった観客を、敢えて挑発的な難民のイメージで裏切り、ドイツ演劇界の難民との向き合い方を自己批判するような作品でした。残念ながら難民表象が差別的であるということであり学術的に研究されませんでした。とても重要な作品だと思います。

それ以降、公民館やカフェといった劇場の外で難民が自分たちで組織して行うような演劇、あるいは劇場や俳優と一緒にやるのではなく、一般市民と協力しながら行う演劇実践が数多く登場しました。

これは先ほどの「統合」と「同化」の話と関係します。最近ではインターカルチュラル（interkulturell）ではなく、トランスカルチュラル（transkulturell）な演劇実践が求められるようになってきています。インターカルチャーというのは、もともと「ドイツ的なもの」とか、「ドイツの主導文化（Leitkultur）」とか、「均質な文化」が存在するとした上で、それらに対して「異質なものを」接続し、対話や交流による歩み寄りを期待するものです。インターカルチュラルな実践は、長らくドイツの移民教育や演劇教育が目指してきたものであり、移民のドイツ社会・文化への

「統合」や「同化」を期待したものでした。しかし、最近では、「均質な文化」なるものがそもそも存在しないとした上で、一人一人が個別の特性を持つことを認め、個人同士が交流してその多様性を認め合う、よりトランスカルチュラルなパフォーマンスを作ろう、といったことが演劇では目指されるようになっていきます。

こうしたトランスカルチュラルな試みは、本来「均質なドイツ文化」を呈示する場である伝統的な劇場では不可能である、というような議論もあります。そのため最近では難民と一緒に演劇、あるいは難民が自ら実践する演劇は、常設の劇場からは遠ざかっています。

先ほど東風谷さんからリプライをいただきましたが、本書で使用されている「同化」とか「統合」という言葉が、そもそも国民国家を均質なものとして捉えずにいたいとするバーデの主張とあまり合っていないのではないかと思います。「同化」や「統合」は「プロセス」であるとは書かれているけれども、そもそも「同化」と「統合」というものは、受け入れ側が均質であるという前提の上で成り立つ言葉だと思います。まあこのコメントはバーデに言うべきかもしれません。

まとめてリプライさせていただきました。皆さん、いろいろコメントいただきましてありがとうございます。

川喜田 北岡さん、どうもありがとうございました。今、北岡さんに、リプライから得た刺激について語っていただきました。同じような形で、例えば、転換点としての第一次世界大戦という論点は、リプライの中でも出てきましたが、清水さんとしてはいかがでしょうか？本日のリプライと議論全体をお聞きになって、最後に何かこの場に提起しておきたいメッセージがありましたら、ぜひご発言いただきたいと思います。

清水 ありがとうございます。第一次世界大戦と国境の変動も、かなり連動する問題かと思いました。書評会ということで私もいろいろ疑問を投げようということだったのですが、たくさんのご意見くださり本当にありがとうございます。私もやはり第一次世界大戦を一つの転換点と見て間違いなかったということで、少し安心しております。それから東風谷さんからリプライでもいただきましたが、国民国家というイデオロギーが急進化したという視点が非常に重要だと思います。国民国家を現象としてではなくて、イデオロギーとして捉えようとするれば、ヨーロッパ史全体についても、移民／難民についても、見直しする余地がかなり出てくると思います。

国境変動のないスイスにとっても、第一次世界大戦は一つの転換点でしたが、これはスウェーデンにも当てはまります。スウェーデンは1914年に「国外退去法」を作ったこ

とで、中立国でありながらも第一次世界大戦のあおりを受けています。それならば鈴木さんにコメントいただいたように、共通項としての第一次世界大戦も移民史のコンテクストに、十分導入され得ると思います。

そのためヨーロッパ史を第一次世界大戦から見直してみると、全ての根拠やはり第一次世界大戦ではないかと思えます。今回の書評会も踏まえて、もし別の所で、「あなたは国際政治学者として、世界史およびヨーロッパ史の転換点と、現在のさまざまな国際問題の出発点はどこだと思えますか」と聞かれたら、私は躊躇せずに第一次世界大戦とその帰結であると答えると感じています。

次にヨーロッパ内の移民とヨーロッパ外の移民についてですが、どこから来たかだけでなく、最近ではヨーロッパをどのように表象するかという問題もあります。この辺の社会現象をもう一度見直すにあたって、あるいはこれから新しく近現代ヨーロッパ政治史もしくは移民を研究したい人にも、本書を間違いなくお薦めしなければいけないと感じました。この度は、大変興味深い本を読ませていただきました。貴重な機会いただきまして、ありがとうございました。

川喜田 清水さん、どうもありがとうございました。衣笠さんにコメントの最後で提起していただいた、国境自体が人の頭を越えていくという現象には、かなりの方が関心を持っていることが分かりました。私も非常に面白いと思ったのですが、その点も含めて、本日の全体の議論をお聞きになっていかがでしょうか。

衣笠 ありがとうございます。まず、第一次世界大戦が画期だという点について、付け加えさせてください。僕もそうした議論に全く異論ありません。もう少し細かく言うと、僕の研究は第一次世界大戦後の話で、特に博士論文で第一次世界大戦後の混乱期について扱っています。この意味で言うと、画期になったのは第一次世界大戦そのものではなくて、第一次世界大戦直後の時代ではないかと思えます。それはなぜかという、最近翻訳されたローヴェルト・ゲルヴァルトの著書『敗北者たち』でも書かれているように、やはり1917年のロシア革命から相対的安定期の始まる24年までの時代は非常に重要です。こうした文脈の中で戦間期の枠組みは設定されていくことになりました。先ほど The Great War という話が出ました。実は僕は博論の中でこの The Great War の後の時代をポスト大戦期と呼んで、その時代こそが現代の画期だと主張しているのです。

清水さんの議論の中で国民国家も出てきたので、付け加えたいのですが、国民国家はイデオロギーだというのはまさにそのとおりです。特に戦間期においては、実態というよりは、イデオロギーでした。その時期について藤井さん

は僕よりよくご存じだと思うのですが、ピーター・ジャドソンなどの議論を篠原琢さんが紹介されていますけど、スモール・エンパイア（小さな帝国）論が最近では日本でも導入されてきています。

つまり帝国が崩壊した後に東欧と中欧に出現した国民国家は、実は国民国家ではなくて、実態としては帝国だったとみなされるのです。それらは小さな帝国であり、その中でマイノリティを抱えながら、どう運営していくかが問題だったという新しい議論が登場してきています。だからこそ実態とイデオロギーを分けて考えなくてはならないということに強く同意します。そのため国民国家イデオロギーに移行していく画期が第一次世界大戦、もしくはポスト大戦期であって、第二次世界大戦もしくはその後の住民移動などによって、強制的に国民国家に実体が伴ってくるということになると考えています。

もう一点は、今のウクライナの戦争についてです。ここでもやはりポーランドがかなり重要で、実はちょうど一年前のポーランドは難民を歓迎していませんでした。まさにウクライナの戦争の直前でしたが、中東からの難民問題が発生したときに、ポーランドは基本的に受け入れを拒否する姿勢を取ったわけです。ベラルーシとの国境で放水したりして難民の入国を拒否しました。それが、ウクライナ戦争が起こると一気に70万から100万人くらいの難民をポーランドは受け入れています。

これが何を意味するのかについての現代的な観点は大切だと思います。既に議論になっていますが、何を基準にして包摂し、何を基準にして排除していくのかということが一つの論点になってきます。それに対してドイツは2015年の難民が来たときから「歓迎の文化（Willkommenskultur）」と言って歓迎してきました。これは佐藤成基さんの言うホロコースト・アイデンティティが関わっているのかもしれませんが、そういう過去の経験からそれを生かしていこうというドイツの姿勢があり、メルケル政権時代には相当程度排除に反対していたということは本の中で書かれています。

とはいえやはりドイツを見ることによって中東欧の国々とドイツの間での難民に対するアンビバレントな姿勢が際立ってくるような気がします。この辺りは、特に民主主義を考える上で重要なポイントだと思います。少し長くなりましたが、以上です。

川喜田 どうもありがとうございました。評者の皆さんから、本日の大事な論点についてのコメントを改めて伺いました。訳者の皆さんから何かまた付け加えたいことがあるようでしたら、ぜひ伺っておきたいと思っておりますけれども、大丈夫でしょうか。よろしいようでしたら、そろそろ会としてはまとめる方向に向かっていきたいと思っております。

本日は、コメントをしてくださった評者の方々も、訳者としてご参加いただいた方々も、どちらかといえば若いほうの世代に属されます。いろいろな分野からお呼びしたということもあって、なかなか面白い議論ができたと思っております。もう少し時間があれば、私も参戦したいところでした。

例えば、北岡さんからご指摘のあった、誰が語るのかという視点の問題、清水さんが提起された第一次世界大戦とその後の時期がもつ大きな意味という問題、衣笠さんらのご指摘のあった国境の問題、そして、われわれがこうした問題を考える上で、今、大きくのしかかっているウクライナという問題。いずれもそれぞれに学びを得ることのできる内容だと私は思いました。

それでは最後にこの書評会を主催したドイツ・ヨーロッパ研究センターの元センター長であり、現・副センター長でいらっしゃる石田勇治先生より、閉会のごあいさつをいただきます。石田先生、どうぞよろしく願いいたします。

\* \* \* \* \*

## 【閉会挨拶】

こんにちは。皆さんの素晴らしい議論を画面越しに嬉しく拝見・拝聴しておりました。登壇者の皆さんはどなたもよく練り上げられた、そして的を射たお話をして下さり、感謝に堪えません。

クラウス・J・バーデの著作を何らかの形で出版したいという増谷先生の思いはかなり前からあったように思います。私の記憶では、1990年代の半ば、外語大がまだ北区西ヶ原にあった頃ですが、増谷先生の研究室のテーブルにバーデ編による „Deutsche im Ausland“ という大部の論文集が置いてあったことを覚えています。

あの頃も、今とは少々異なる文脈ですが、難民問題が喫緊の政治的課題になっていました。ドイツ統一の直後でしたが、冷戦構造の崩壊とともに流入する難民に対する住民の不安や反発が、暴力の発露という形で現れたのです。ゾーリングゲンやロストックなどで難民が襲われ、その住まいに火が放たれ、難民の命が絶たれるという痛ましい事件が起きました。この文脈で、戦後ドイツが大切にしてきた庇護権（基本法16条）のあり方をめぐる議論が高まり、最終的にその制限へ繋がったことを覚えています。

それから30年近くたちましたが、「人の移動」に伴う難問は現代ドイツの政治、社会、文化の様々な側面に影を落としています。実は、「人の移動」をテーマにした当研究センターのイベントは、今回が初めてではありません。一昨年秋に、川喜田さんが編者の一人を務められた論文集

『引揚・追放・残留：戦後国際民族移動の比較研究』（名古屋大学出版会）の刊行記念シンポジウムを開催いたしました。この本は、日本、アジア・太平洋、ヨーロッパにおける第二次世界大戦後の国際的人口移動の研究という非常に大きな射程をもつものでした。本日のイベントはこれに連なるものです。

今回、当研究センターが、ヨーロッパを対象に「人の移動」関連のシンポジウムを開催できたことは、今後につながる貴重な経験になったと思います。ドイツ、オーストリア、スイスなどドイツ語圏といっても、共通点だけでなく、国民国家形成の過程でそれぞれの特性が生じ、その特性に応じた政策論争があることも比較を通して分かってきました。当研究センターは、ドイツ一国だけでなく、ヨーロッパ近隣諸国との学術交流、研究対象の広がりを追求するべきでしょうが、同時にドイツ語圏というまとまりも強く意識しなければならないと思います。

幸い当研究センター関係者の中に、穂山さんや鈴木さんのように、まさにドイツ語圏の研究を専門にされている方がいらっしゃいますので、引き続き、いろいろなところで、研究成果を結び付けてくださればありがたいと思います。

さて、本日のお話で多くの皆さんが指摘されていましたが、第一次世界大戦が重要な転換点という点、私もその通りだと思います。第一次世界大戦とその戦後処理の中から、次の時代の形が出てきました。これが種々の問題を孕んでいたことが、次の戦争を招来したわけですが、同時に、現在の世界の難民問題やロシアのウクライナ侵攻を考える際のひとつの原点として、第一次世界大戦とその直後の時期は非常に重要だと思います。

最後に、移民に関してオーストリアの国民的作家シュテファン・ツヴァイク（1881～1942）を引き合いに出してお話を終えたいと思います。北岡さんもよくご存知だと思いますが、彼は『昨日の世界』という本を書いています。この本については、第一次世界大戦の前の時代を懐かしく描いているという誤解がありますが、そうではありません。ウィーン生まれのユダヤ人であるシュテファン・ツヴァイクは、ユダヤ人としてのアイデンティティーを持ち、よく知られているようにコスモポリタンで平和主義者でもありました。そのためナチに迫害されるわけですが、同時にオーストリア人という自覚を強くもつようになります。そういう意味で、彼は戦後のオーストリアのアイデンティティーにつながるような人物です。

ツヴァイクの『昨日の世界』には、パスポートに纏わる話がでてきます。ツヴァイクは、パスポートが制度として導入されたのは、第一次世界大戦の後だと主張しています。彼は大战前に世界中のあちこちへ出かけた人ですが、パスポートのような代物は見たことがなかったと言ってい



ます。このことを後に若い人たちに話しても信じてもらえなかったとも書いています。パスポートが入国管理強化の道具になってしまったというわけです。

ツヴァイクは、オーストリア社会民主党の共和国防衛同盟の「二月蜂起」(1934年2月)に関連して弾圧され、イギリス、その後アメリカに亡命。そしてブラジルで再婚相手の妻とともに自殺を遂げるという波乱万丈の人生を送りました。大変な人気作家で大きな影響力を持つ文学者ツヴァイクが、亡命を強いられ、その体験を踏まえて描いたものが『昨日の世界』という回想文学でした。亡くなる前にこれだけは書きとめたいという意味によって書かれたもので、データも乏しい中で執筆されたために史実に合っていない記述もありますが、同時代人の目を通してこの時代を考えることができる、歴史家にとっても興味深い作品です。

本筋から離れた話をしてしまいましたが、最後に登壇者の方々をはじめ、さまざまな形で参加して下さった皆さんに心より感謝を申し上げます。

川喜田 石田先生、どうもありがとうございました。最後にまた新たな燃料が投下されたのでいろいろと刺激されて、言いたいことが出てきてしまいました。今日は第一次世界大戦とその転換点としての重要性が話の焦点になりました。逆にあまり議論されなかったのは、とくに19世紀以降、近代国家による国民の管理がイデオロギー的にも制度的にも整っていく道筋における連続の側面だと思います。

穂山さんがおっしゃっていた救貧、すなわち誰が貧者を救う義務があるのかという問題、「庇護権」という考え方の登場、19世紀後半以降のナショナリズムの強まりがマイノリティに対する扱いと人の移動に与えた影響、加えて今、石田先生がおっしゃった入国管理とパスポートの問題などは、いずれも19世紀以降の展開を長い連続性の中で捉えていくうえで重要な鍵を提供してくれるものと思います。

懐かしい顔が多いので、だんだんにゼミで議論をしているような気分になってきました。名残は尽きませんが、以上をもちまして本日の書評会は閉会となります。本日は、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターの催しにご参加いただきまして、誠にありがとうございました。次の催しでまたお目に掛かれますことを楽しみにしております。どうもありがとうございました。

(了)